

研究課題 (テーマ)	ウイズコロナ時代の急性期臨地実習における VR 手術室看護教材の学修の実態		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部看護学科	教授	栞子 嘉美
	看護学部看護学科	教授	城戸口親史
	看護学部看護学科	准教授	河相てる美
	看護学部看護学科	講師	寺内 英真
	看護学部看護学科	助教	竹口 将志
研究結果の概要			
<p>本研究は令和4年度「ウイズコロナ時代の急性期看護実習における手術室見学実習用の学修教材の作成」の継続的研究となる。令和4年度は同教材作成が目的であり、予定外に令和5年1月以降の本学部の成人看護学実習（急性期）Iを学修した3年次生60名（実習2クール）と、既に手術室実習を終了した4年次生2名を対象として、体験学修を実施し、評価した。特に、3年次生に対しては、各実習の2週目の学内実習日に本教材で行ったため、当該学生は実習期間中に手術見学や周術期看護を学んでいる者も多く、復習的な学修でもあった。</p> <p>結果としては、24の評価項目に対する結果は、教材学修前の平均値＝<math>3.05 \pm 0.56</math>、学修後の平均値＝<math>4.3 \pm 0.27</math>（5段階評価）であり、学修効果が明らかとなった。また、教材評価も行い、学修重点項目に対する学生の自己・他者評価は、手術を受ける患者の心に寄り添うケアの要点、麻酔導入時と執刀開始直前の確認方法やその重要性についての理解ができたこと、映像が頭に残り学修しやすいなどの意見が得られた。</p> <p>令和5年度は、実習初日に学内実習として、オリエンテーションの一環で本教材の学修を取り入れた。これは、レディネスである2年次からの周術期看護の基礎知識、実習前の事前学修を強化し、実習における手術室見学実習の実際や看護過程の展開に繋げることをねらったものである。</p> <p>また、昨年度は本教材が1基しかないため、1クール30名の学生が1名ずつ学修し終了するまで長時間にわたり、且つ後半は教材の長時間使用による音声不良などのトラブルがあった。そのため、教材を2基用意するとともに学生自身のVR教材学修時の視線を録画し、再学習できるようにした。最終的に、令和5年10月から令和6年2月に、1クール約30名、4クールで実習した119名の学生が本教材学修を体験した。</p>			
今後の展開			
<p>研究対象者119名は、令和5年度成人看護学実習I（急性・回復）の評価が確定したため、倫理申請した手順で4年次となった当該学生にこれから研究依頼をしていく。研究に同意した研究協力者にすでに提出済みの学修前後の評価と合わせ、教材学修が看護過程の展開等、実習に有用であったかの調査を進める。</p> <p>また、同教材はR6年度本学4回生の成人看護学実習I（急性・回復）でも活用していく。その際、今回の調査で得られる学修指導への示唆を反映させる。</p>			